

舞台は、いつも、移動している。活字のなかの闇から立ちのぼった声が、赤い髪の女がいる店へ、頭の中へ、画面のなかへ、自由自在に移って、飛び火していくのだ。区切りというもの、壁がない。あらゆる声が、つるつる滑って、光り、疾走し、消えてしまう。形になる前の、種子に似た、透明なそれが、X氏の頭のなかにある。思想になる前の、まだ未知の、名前のないものが浮遊している。

3時だ。昼食時の賑わいが色褪せて、店が一番静まりかえる時間だ。雨が降り続けているとはいへ、7月だ、まだ、まだ夕方には間がある。新しく何かを始めるには遅すぎるし、夜にするべきことを始めるには、少し早すぎる。結局、X氏は、宙吊りになって、どこの岸辺にも打ちあげられることもなく、酒のなかを漂い続ける。テーブルの上には、生酒の空ビンが5本並んでいる。X氏は、空ビンを頭の高さまであげて、左右に振る。無言のまま、赤い髪の女が生酒を運んで来る。

雨に濡れた赤犬が、餌を漁りながら公園の片隅を歩いている。夏の、日焼けした子供たちの姿はない。白く光る歯が見えない。黄色い声もあがらない。あの子供たちは、どこへ行ってしまったのだろう。広場には水があるだけだ。まるで大量の人間たちを溶かしたような水が流れている。

長雨だ。何かが、静かに、ひそかに、深いところで、表面で、進行しているような気配がある。誰も、それを声にすることができない。それは、形にならない。証明できるものではない。しかし、一度現れてしまえば、誰もが、そんな気がしていた、わかっていたと自然に語りはじめるだろう。

う。100匹目の猿が、その正体をあらわしたとき、それが当然で、自明のものとなってしまいうように。誰も、それが、幻だとか怪物だとかは思いはしない。それにはその正統な名前がつくのだ。

煙草に手をのぼした。箱には煙草が1本もなかった。指を箱のなかに入れて探ってみる。ない。ない。と思った瞬間、指先を中心にして妙な感覚が生じて、X氏の全身を透明な風となって走りぬけた。X氏は、階段から足を踏みはずしたようなおどろきに不意を突かれ、テーブルの上に並んでいる生酒の空ビンが、急に物の影のようにその存在感をうすくして気配が変わってしまったことに気付いた。ないと感じてしまったことが、心を傾斜させ、X氏の顔から落着きを奪い、不安のさざ波が無数の糸となって顔を走り続けた。空ビンを眺めている眼が、実に頼りない。7本の空ビンが実体から影へ移行してしまったふうで、1本、2本、3本とかぞえてみても、どうも、ものの手ごたえがない。眼には、確かに、7本の空ビンが映っている。それは、赤い髪の女が運んできたものだ。呑んだのはX氏だ。まちがいはない。はじめは何もなかった。1本、2本とあの女の白い手が、7本まで、そこに置いていった。ゼロからはじまって、いや、ないことは、ゼロと呼べるだろうか？ 空っぽの、何も無い空間は、ゼロと呼ぶよりも単にないと言った方が正確ではないか。ないと感じたとき、ゼロとは思わなかったはずだ。それは、別のものだ。1本、2本、3本、4本、それらの差は、すべて平等に1だが、1とゼロとの差は、決して、1ではない。そこには、無限のへだたがりがある。もちろん、ゼロは、無ではない。したがって、無は、空ビンがないことでもな